

凍霜害に伴う農作物等の技術対策

【野菜】

○事前対策

- ・トンネル栽培で被覆フィルムの裾を上げているところでは、夕刻にフィルムを降ろし保温する。なお、翌朝にはトンネル内温度の上昇に合わせ換気する。
- ・露地野菜で、晩霜害の恐れがある品目は、寒冷紗等のべたがけを行う。被覆したままでは気温の上昇等により株が傷む恐れがあるため、適宜除去する。
- ・施設では、暖房機が稼働するように電源スイッチを入れ、重油残量を確認しておく。また、被覆資材の破れや隙間がないことを確認し、入口やサイドから外気が入らないようにする。

○事後対策

- ・ハウスの密閉状態が続くと施設内が多湿になり、病害発生に好適な環境となるため、低温障害を受けないように留意しながら、十分な換気を行う。
- ・凍霜害により茎葉が傷んだ場合には、草勢が回復した後、殺菌剤を散布し病害の発生を防ぐ。

【花き】

○事前対策

- ・露地栽培（ホオズキ、キク等）では、不織布等のべた掛けを行い、防寒対策を実施する。
- ・無加温施設栽培（シンテッポウユリ、花壇苗等）は、サイドフィルム等を閉めて必要に応じ、トンネル等で防寒対策を行う。
- ・加温施設栽培では、暖房機が稼働するように電源スイッチを入れ、重油残量を確認しておく。また、被覆資材の破れや隙間がないことを確認し、入口やサイドなど隙間風が入らないように閉めこむ。

○事後対策

- ・凍結した場合は、そのままの状態に回復するのを待つ。
- ・病害防止として殺菌剤を散布する。

【果樹】

4月中旬まで、急な低温に遭遇することで、ナシやモモ、スモモでは結実不良、ブドウやキウイフルーツでは芽や新梢の枯死、イチジクでは主枝の枯れ込みの被害が予想される。凍害を受けると、ナシやモモでは胴枯病、キウイフルーツではかいよう病に侵されやすくなる。

○事前対策

- ・樹冠下の敷きわらやマルチは、地表面からの放射熱を遮断して被害を助長するので、除去する。また、草は低く刈り込む。
- ・ナシ、モモ、スモモ、ブドウ等の無加温ハウスでは、石油ストーブ等による夜間の燃焼や、日中曇天時のサイド被覆により、ハウス内の保温に努める。

- ・露地では、燃焼資材の活用により凍霜害の発生防止に努める。燃焼資材を用いる場合は、火災防止のため周辺環境に十分配慮するとともに、固形燃料や灯油等、ばい煙の発生が少ない燃料を使用する。
- ・ナシ、モモ、スモモで生育が前進化している場合は、摘蕾、摘花の程度を軽めにし、着果数を確保する。
- ・開花中のナシでは、気温が15℃以上となってから、丁寧に受粉を行う。
- ・イチジクは、防寒資材で主枝を保護する。

○事後対策

- ・ナシ、モモ、スモモでは、被害果を優先して摘果する。着果数が不足する場合は、軽微な傷果は着果させて着果数の確保に努める。
- ・樹勢の回復を図るため、被害状況にあわせて摘果を行う。
- ・ナシ、モモでは胴枯病に注意し、発病した場合は、被害部を削り取り保護剤を塗布する。また、キウイフルーツではかいよう病の対策を行う。
- ・落葉果樹ではククイムシの加害が多くなるので、主幹や主枝を中心に対策を行う。